へるん先生を巡る旅

小林　綾子（S48 年卒）

北高は川津校舎だったが松江一中卒なので、赤山の二本松にも馴染んできた。「見よや松江の赤山に」で始まる校歌二番に「西のうたびとラフカディオ」という一節がある（井上赴作詞、岡本敏明作曲、1952 年）。へるん先生お気に入りの城山稲荷は祖母とよくお参りした。木暗い中にお狐さんが並んでいた。

2019 年に「妖精の国」アイルランドを旅したが、オッサンだったりするので妖怪の方が似つかわしい。司馬遼太郎は『愛蘭土紀行』に「レプラコーンに注意」の標識について書いているが、私が同年に旅した奄美大島でも「ケンムン（妖精）に注意」の標識を見た。アイルランドには猫や人魚の妖精、泣き女の言い伝えもある。非公開だが、ダブリンには「小泉八雲の家」がある。旅に前後して私の日常生活にアイルランドが浸透してきた。アイリッシュ・コンサート（八木倫明主催）での小泉八雲作品の朗読、近隣の大学での高畑吉男のハープ演奏付き「妖精の語りべ」講義、聖パトリックデー・パレードなどに参加したし、コロナ禍を経て、へるん先生の母の国ギリシャやイギリスも巡った。

へるん先生のイメージは、1983 年 NHKTV「日本の面影」（山田太一脚本）でのジョージ・チャキリスと檀ふみのご夫婦だ。1850 年生まれのへるん先生は幼少期をダブリンで大叔母に育てられた後、イギリスで学ぶ。その後アメリカへ渡り、新聞記者をする一方で異文化に惹かれて民俗伝承の本等も出している。1890 年に松江へ来てから数々の書籍を残したのは、旧制松江中学の西田千太郎、小泉セツの愛ある尽力の賜物だが、埋もれた思想家雨森信成の功績は大きい。彼は日本の庶民の心を卓越した英語で語り合い、『ある保守主義者』のモデルとされる。へるん先生は「一個の自我より先祖からの記憶や感覚の集積を重んじた」（平川祐弘『日本回帰の系譜』）。熊本のへるん旧居も保存され、ケルト文化の講座もあった。次なる旅はくまもんの国か。「汽車に乗ってアイルランドのような田舎へ行こう・・・」（丸山薫）　　<敬称略>

スライゴー
妖精学に傾倒した詩人イェーツの墓地もある

モハーの断崖
8 キロ続く絶壁　強風の中海鳥が飛び交う

バレン高原
巨人のテーブル　石灰岩と高山植物

ダブリン
ヘルン幼少期祖母と暮らした首都　活気あるアイリッシュパブ